

「七月王制」成立の政治的周辺

高 村 忠 成

目 次

- 一、序 文
- 二、栄光の三日間
- 三、国王ルイ・フィリップ一世の誕生
- 四、ルイ・フィリップ
- 五、結 び

一、序 文

本稿の目的は、ルイ・フィリップ (Louis Philippe, 1773-1850) によるいわゆるフランス「七月王制」(La Monarchie de Juillet) の成立過程とその周辺を探ることにある。「七月王制」とは、ルイ十八世 (Louis XVIII, 1755-1824) およびシャルル十世 (Charles X, 1757-1836) の「復古王制」(La Restauration, 1815-1830) のあとをついで成立したフランスの

政治、経済、社会体制の総称で、『七月王制』という名称は、『七月革命』の中からルイ・フィリップの政府が誕生したという状況をふまえて、命名されたものである⁽¹⁾。

「七月王制」は、一八三〇年七月から⁽²⁾一八四八年二月まで約一八年間続く。その期間は、一般的には、ルイ・フィリップの政権が誕生してから安定するまでの間と、それ以後安定期を経ていわゆる「二月革命(Révolution de Février)」によって崩壊するまでの間と、二期に分けられる。すなわち、「一八三〇年から四〇年までと、一八四〇年から四八年までとにである」⁽³⁾。

こうした区分を前提として、本稿は、特に、この「七月王制」が、「七月革命」を経て、誕生し、出発するまでの間に焦点をあてている。思うに、「七月王制」の萌芽ともいふべきその成立と政治的周辺を探ることは、実に興味深いものである。

フランス革命によって絶対王制が否定されて以来、フランスは、その政治体制として、共和制、帝制をとるが、いづれも長続きをせず「復古王制」の時代を迎える。

革命後、王制を復活させたことは、フランスにとってみれば、よほどの覚悟であったにちがいない。あれほどの革命とその原理を支持していながら、「立憲憲章(La Charte Constitutionnelle)」という憲法を課しているにせよ王制に復帰したことは、フランス国民が「ブルボン王朝(La dynastie des Bourbons)」に、フランスの繁栄と秩序を達成する最後の望みを掛けたといえよう。

しかし、多くの期待を担って出発した「復古王制」も、国王が政争の頂点に立ち、しかも、憲章を濫用するという「立憲君主制(Monarchie Constitutionnelle)」の成立基盤を侵してしまったために、滅びざるをえなくなった。

またも王制が失敗したのである。その王制のあと、なぜ、再びフランスは、王制を存続させようとしたのであろうか。換言すれば、「七月王制」は、どのような背景から、いかなる過程を経て成立したのか、ということである。こ

の点に対する理解こそが、「七月王制」の政治的状況、性格そして崩壊などについて知るために、不可欠のものである。

本稿は、「七月王制」の成立の政治的周辺という問題を、主として、新国王ルイ・フィリップに焦点をあて、彼をめぐる諸党派の動きと、彼自身の行動を当時の資料を参考に、浮き彫りにしようとする試みである。

エンゲルス(Friedrich Engels, 1820-1895)は、ヨーロッパの君主のうちで、とくに興味深い四人をその特徴を示してあげている。すなわち、「率直にかつはばかるところなく公然と、専制主義にはげんでいるロシアのニコライ(Nikolai I, 1796-1855)と現代のマキアヴェリにあたるルイ・フィリップと、立憲主義的な女王の申し分ない模範であるイギリスのヴィクトリア(Alexandrina Victoria, 1819-1901)と、フリードリヒ・ヴィルヘルム四世(Friedrich Wilhelm IV, 1795-1861)⁽⁴⁾」。⁽⁴⁾ エンゲルスのいう現代のマキアヴェリ、ルイ・フィリップは、いかにして国王になったのであるか。

- (1) A. Malet et P. Grillet, XIX. Siècle, 1815-1914, Chapitre 11. La monarchie constitutionnelle en France, 1815-1848, p. 73.
- (2) ルイ・フィリップが正式に即位するのは八月であるが、「復古王制」は、「七月革命」によって七月に倒される。
- (3) Malet et Grillet, op. cit., p. 73.
- (3) 大内兵衛・細川嘉六共訳『マルクスエンゲルス全集第一巻』(大月書店)四八六頁。「プロイセン国王フリードリヒ・ヴィルヘルム四世」。

二、栄光の三日間

「復古王制」が崩壊したのは、一八三〇年七月二七、二八、二九日のいわゆる「栄光の三日間」(Les trois glorieuses)

とよばれる戦いを軸とする「七月革命」によってである。

「復古王制」は、王制とはいえ、「立憲憲章(La Charte Constitutionnelle)」によって国王の権限を制限し、イギリス風の議会政治に範を求めた、いわゆる「立憲君主制(Monarchie Constitutionnelle)」であった。国王が憲章を守り、議会を重んじ、国民の信頼を勝ち得ていたならば、その体制は長く続いたであろう。

しかし、ルイ十八世の時はまだしも、シャルル十世が即位すると、彼は反動的な巻き返し政策を取り、議会を無視し、憲章の精神を踏みにじった。

革命はもちろん、ただ一つの原因から起るということはない。政治的、経済的、社会的な様々な要因がおり重なって勃発するものである。ただ、最後の爆発を引き起す要因——発火点になるものはある。「七月革命」の場合、それは、一八三〇年七月二六日の「四箇の勅令(Quatre Ordonnances)」であったといえよう。

シャルル十世は六七才で、兄ルイ十八世のあとをついで即位した。彼は堂々たる体軀を誇る人物で、純粋な貴族であった。「彼は、自分の友人たちに対しては誠実で、親切であった。威厳の中にも優しさをもち、彼を知る人に対しては、彼のために仕えようという気持を起させる魅力をもっていた」⁽¹⁾。

ただ彼は、「あまり知性的ではなかった」⁽²⁾。彼は、自分の好みに応じて行動し、「議会政治の必要性とか、自分と自分の側近たちが、新しく台頭してくる世代と、どれ位離れているのか、その程度などを理解できなかった」⁽³⁾。

彼は、議会が大臣を選び、法律は議会が審議するのが理想的であるとは考えず、自分の意のままに動く側近を大臣に任命し、それを通して、議会を左右しようと狙っていた。彼が、めざしたことは、亡命貴族の財産を取りもどし、その貴族たちに支持されてブルボン体制の安泰を計ることであった。その反動的気風は、民衆に危機感を与え、やがて、議会における野党勢力の伸張をもたらし、共和派の怒りを買った。

「復古王制」没落への道は、まづ、シャルル十世が一八二九年八月八日、帝制の時ナポレオンを暗殺しようとした

名だたる反動家ポリニャック (Polignac) を内閣首相に任命したことによって開かれた。ポリニャックは、三〇年三月、議會を停会にし、五月には解散してしまった。こうした政府の暴挙のため続く六月二三日から七月一九日までの選挙では、輝かしいアルジェリア遠征の大勝利という結果にもかかわらず、政府側は敗北した。このことによって政権の崩壊は速められた。

そして、最後に、三〇年七月二五日、新任の内相ペイロンネ (Peyronnet) が発案し、ポリニャックが準備した「四箇の勅令」をシャルル十世が承認し、署名したことによって革命の幕は切って落された。

(一)、出版の自由の停止、(二)、未召集議會の解散、(三)、選挙法を改定し、地租のみを選挙資格の基準とする、(四)、次期選挙日を九月初旬とする、以上の規定からなる勅令は、憲章の第十四条で保証されていると、シャルル十世は確信した。

すなわち、「国王は、……法律の執行と国家の安全のためには必要な規則と命令を制定する⁽⁴⁾」との項目を、「もし国王の特権が、民衆側の言論活動によって危険な状態に置かれたならば、国王は、全権を掌握し、必要な時には、現行法に反しても勅令を発し、統治することができる⁽⁵⁾」と解釈した。だがこの勅令は、明らかに憲章それ自体を否定するものであった。

七月二六日、勅令が、政府の機関紙『モニテール (Moniteur)』紙に発表されると、反抗の火ぶたがまづ、新聞記者 (Les journalistes) たちの手によって切られた。

勅令によれば、今後いかなる新聞も、政府の許可なしには発行できなくなるからである。

『ナショナル (Le National)』紙の編集局に集まった四十三名の新聞記者たちは、ティエール (Louis A. Thiers, 1797-1877) が起草した声明文 (manifeste) に署名した。その声明文は主張している。

「法律にもとづく体制は、もはや存在しない。暴力によるそれがはじまった。……政府は、国民に服従を強いるだけ

の合法性をもちやもっていない。われわれは、自らの利益を守るために政府に反抗する。この正義の反抗を、どこまで広げるかを決定するのは、まさにフランスである⁽⁶⁾」と。

これは、政府が言論の自由を奪い、さらにそれにもまして、権力を濫用するならば、政府打倒までありうるというシャルル十世に対する挑戦状であった。

声明文は、広場で、市場で、酒場で読み上げられ、翌二七日には、『ナショナル』紙をはじめ、野党各紙に掲載された。

次に、印刷所が、工場を閉鎖し、印刷工が街頭に出た。続いて、実業家や、商人も、一人でも多くの人が街頭デモに参加できるように、店を閉めた。反政府政治勢力の結集が、こうして着々となされていった。

このようなパリの状態をよそに、シャルル十世はその頃、「サンークロー城(Saint-Cloud)で狩猟をしていた。彼はパリにおける警察と軍隊の力を信じていた⁽⁷⁾」。軍隊の主力が、まだアルジェリアにあり、パリの警備が、手薄であることを彼は認識していなかった。民衆の暴動ぐらい警察と残っている軍隊の力でいっぺんに弾圧できると過信していた。

現状を絶えず正確に把握し、適切な手段を講じるといふ基本的なことすら彼は忘れていた。ドラクロア(Ferdinand V. E. Delacroix, 1798-1863)の絵で有名な「栄光の三日間」の戦いはこうしてはじまったのである。

七月二七日(火曜日)

仕事場、店などが閉鎖されたことによって、自動的に失業した(*contraint au chômage*)印刷工や労働者たちは、街を走り回って仲間を集めた。少しずつパリは怒りに燃えた民衆であふれてきた。政府が、軍隊を出動させた時、主要な通りはすべてバリケードによって封鎖されていた。

パリの交通路は、ひっくり返された馬車や、切り倒された木や、窓から投げ出され、うず高く積み重なった家具などによって築かれたバリケードと、めくられた歩道の石によって完全に遮断された。軍隊は動きがとれなかった。

こうした中で、政府の許可なしに『ナシヨナル』とか、『グローブ (Le Globe)』とかいくつかの勅令に反対する声明文を載せた新聞が発行された。警察はただちに、回収をはじめたが、不可能であった。

やがて、労働者を中心とした暴動に理工科大学 (l'École Polytechnique) の学生が加わり、革命の波紋はみるみるうちに広がっていった。

一方、労働者や学生からなる共和派のこうした動きに対して、自由主義的な代議員たちは、二七日午後三時に、実業家カジミール・ペリエ (Casmir-Périer, 1777-1832) の家に集った。約三〇名である。

彼らは政府の態度は、当然許せなかったが、共和派の民衆の「暴動的反抗も支持することはできなかった」⁽⁸⁾。彼らは、革命を欲しなかった。そこで、代議員たちは、復古王制時代に純理派 (Doctrinaires) の論客の一人として活躍し、憲章のもとフランスを立憲君主制にしようと主張していた歴史家ギゾー (François Guizot, 1787-1874) に、勅令に反対する抗議文 (le texte d'une protestation) を準備するように委託した。

サンークルー城では午前十一時半、マルモン元帥 (le maréchal Marmont) が、シャルル十世によびだされていた。国王は元帥に命じた。

「元帥、君がパリで軍隊の指揮をとりたまえ。そして、暴徒を蹴散らしてくれたまえ。夕方までに私が望むように鎮圧してくれたならば、君は、サンークルー城で休んでよろしい」⁽⁹⁾。

この人選は誤りであった。ナポレオンの最高の予備軍の元帥であるマルモンは、一八一四年四月四―五日の夜、エソンヌ (Essonne) に舎営していたが突然部隊をひきいて敵側にねがえた。ナポレオンに反逆したので、全く人氣がなかった。彼は、テュイルリー宮殿 (Tuileries) に本部を設け、夕方五時頃までに、パリの主要な戦略地点を占拠し

た。その時、何人かの死者がただけで、それ以上の民衆の抵抗はなかった。夜になると、パリには静寂がよみがえったように思われた。マルモンは、軍隊を兵營に戻した。

しかし、七月二七日の夜から二八日の朝にかけて、反政府側の反抗計画は、着々と進み、復古王制時代の独立派 (Indépendant) の秘密結社で、ブルボン家を打倒しようと狙っていた「炭焼党 (Carbonari) と思われる極左集団」⁽¹⁰⁾ が、熱狂的ではあるがバラバラの共和派を組織した。

七月二八日 (水曜日)

この日は、朝から太陽が焼けつくように照りつけていた。革命の炎が炸裂した。

共和派は、パリ市庁のオテル・ドウ・ヴィル (l'Hôtel de Ville) や、ノートル・ダム (Notre-Dame) を奪い、その上には三色旗が翻った。ノートル・ダムの大鐘が、王制の没落を告げ、共和制の到来を宣言するかにように鳴り響いた。

「パリは、絶対に動じないと確信していたポリニャック」⁽¹¹⁾ は、動揺の色をみせた。マルモン元帥があわてて態勢を整えたのは、昼すぎであった。彼のもとには、「自由に動かせる兵士が八千人しかいなかった」⁽¹²⁾。

それでも軍隊が出動するや、河岸とか、大通り (les boulevards) に沿って動き、暴徒を包囲し、主要な道路からそれらを追い出した。雨のように降りそそぐタイルや、畳石、ビン、家具の中で、軍隊は少しづつバリケードを撤去していった。

しかし、ジリジリと焼けつく暑さと、共和派の必死の抵抗は、兵士たちの志気を鈍らせた。彼らは、重い背のうを負て、食事はおろか、水を飲むことさえできず、極度の疲労と飢えと渴きで死者が続出した。兵士たちは、戦うのが嫌になった。

ヴィクトワール地区でまづ、第一連隊が戦鬪を放棄した。それを機に、いくつかの連隊が寝返った。マルモンは、味方の自滅に驚いたが、手の施しようがなかった。形勢が逆転し、共和派が勢いを盛り返した。

マルモンは、ついにシャルル十世に伝言を送った。

「もはや、たんなる暴動(*une émeute*)などというものではありません。革命(*une révolution*)です。陛下、ただちに、和平手段を講じることが必要です。そうすれば、王朝の榮譽は守られましょう。翌日ではもう遅すぎます⁽¹³⁾」と。しかし、シャルル十世からは、何の返答もなかった。もし、彼が、マルモン元帥の伝言に耳を傾けていたならば、あるいは革命までには到らなかったかも知れない。

午後三時、代議員の代表五名、すなわち、カジミール・ペリエ、ラフィット、モーガン(Mauguin)、ジェラール將軍(*le général Gérard*)、ムトン・ドウ・ロボー將軍(*le général Mouton de Lobau*)らが、「満場一致で採択されたギゾーの準備した抗議文⁽¹⁴⁾」をもって、マルモン元帥のところに来た。

代表は、元帥に、勅令を撤回し、閣僚の入れ代えをするように国王に伝えてもらいたいと要求した。隣の部屋で、その様子を聞いていたポリニャック首相は、その要求をにぎりつぶした。

ここにいたって、自由派代議員たちも、その夜銀行家ラフィットの家に集り、政府打倒の結論を出した。そして、その後には、「進歩派の貴族で、アメリカの独立戦争に参加しワシントンを助けて戦ったラファイエット(La Fayette, 1757-1834)を中心に臨時政府をつくる話⁽¹⁵⁾」がでたり、「何人かがオルレアン公(Duc d'Orléans)ルイ・フィリップの名前をあげた⁽¹⁶⁾」りした。

七月二九日(木曜日)

パリは、全くの混乱の巷と化し、バリケードの山で埋った。革命の激流を遮ることは、もはや不可能であった。テュイルリー宮殿近くの軍隊も敗退し、ルーブル(Louvre)官を守っていたスイス人の守備隊は、革命派の手に落ちた。軍隊は、ついにパリを放棄し、退却した。

この三日間の戦闘で、政府側の軍隊は、「一六三人が死に、八〇〇人が負傷した。革命派は、八〇〇人が死亡し、五〇〇〇人が傷ついた」⁽¹⁷⁾。

二九日午後、再び例の銀行家ラフィットの家に約三〇名の代議員が集った。そして、彼らは、ラファイエットを国民軍司令官(Le commandement de la Garde Nationale)に指名し、「パリの食糧補給を確保するという名目と、市委員会(commission municipale)という名前で」⁽¹⁸⁾臨時政府(gouvernement provisoire)をつくる決議をした。

さて、暴動の三日間、サン・クルー城に閉じ込められ、彼に事件の重要性を忠告してくれる側近に耳もかさなかつたシャルル十世にも、ようやく事態の重大さがわかつた。パリでの「騒動が城まで届き、テラスから望遠鏡でみれば、みることもできる状態にあったシャルル十世は、完全な静寂の中で暮していた」⁽¹⁹⁾。革命を「一つのたんなる騒動(une simple émeute)」⁽²⁰⁾としてしか認識できなかったシャルル十世は、あまりにポリニャックを、盲目的に信頼しすぎていた。二九日午後、シャルル十世は、勅令の撤回に署名し、ポリニャックを罷免して、モルマール公(Duc de Mortemart)を首相に任命した。

シャルル十世の使者たちは、ただちにその旨の通知をもって、オテル・ドウ・ビル、議会、広場に走っていった。だが彼らは、みないたるところで、同じ返事を受けた。「あまりにも、遅すぎた(Il est trop tard)」⁽²¹⁾と。

しかも、使者たちの勅令撤回の通知は伝言であつた。革命派は、それを拒否して、正式に書面でもって発表するよう要求した。時間がまたかかってしまった。

こうして、ついに三日間にわたる戦闘は、革命派に凱歌があがつた。

だが一方、革命派にも動揺があった。革命によってブルボン王制が倒れることは確実になったが、これからどのようにすべきかは、明確ではなかった。このまま王制を残すか、あるいは、共和制をとるのか。とるべき政治体制にフランスは、迷った。「パリには、勝利と無秩序が残った」⁽²²⁾。

セーヌ川の南側にあるパレ・ブルボン (Palais Bourbon) には、代議院があり、そこに集った自由派代議員たちは、王制を残し、国王にルイ・フィリップをもつてくることに意見がまとまりつつあった。リュクサンブール (Luxembourg) には、貴族院があったが、そこには影響力も、決定権もなかった。

セーヌ川の右側と、チュイルリー宮殿の東側の間に、市庁があり、そこに集った共和派の人々は、共和制を樹立しようと準備をしていた。ルイ・フィリップの家、パレ・ロワイヤル (Palais Royal) は、やはり、セーヌ川の北側の提にあり、チュイルリー宮殿に近い。ブルボン家を残すか、ルイ・フィリップと交代させるか。それとも共和制にするのか。また、少数ではあったが、ボナパルト派も機会を窺っていた。

これが、「栄光の三日間」後のパリの状況であった。

- (1) Paul H. Beik, *Louis Philippe and The July Monarchy*, 1965, p. 23.
- (2) P. Beik, *op. cit.*, p. 23.
- (3) P. Beik, *op. cit.*, p. 23.
- (4) Maurice Duverger, *Constitutions et Documents Politiques*, 1967, p. 82.
- (5) Duc De Castries, *Le Testament de La Monarchie IV, De Louis XVIII A Louis-Philippe*, 1814-1848, p. 179.
- (6) Duc De Castries, *op. cit.*, p. 182.
- (7) P. Beik, *op. cit.*, p. 25.
- (8) Duc De Castries, *op. cit.*, p. 182.
- (9) Duc De Castries, *op. cit.*, p. 182.
- (10) Duc De Castries, *op. cit.*, p. 183.
- (11) Malet et Grilet, *op. cit.*, p. 66.

- (12) Malet et Grillet, op. cit., p. 66.
- (13) Duc De Castries, op. cit., p. 183.
- (14) Duc De Castries, op. cit., p. 183.
- (15) P. Beik, op. cit., p. 26.
- (16) P. Beik, op. cit., p. 26.
- (17) Duc De Castries, op. cit., p. 185.
- (18) Malet et Grillet, op. cit., p. 67.
- (19) Malet et Grillet, op. cit., p. 69.
- (20) Malet et Grillet, op. cit., p. 69.
- (21) Malet et Grillet, op. cit., p. 70.
- (22) P. Beik, op. cit., p. 27.

三、国王ルイ・フィリップ一世の誕生

一八三〇年七月三〇日の朝、突然パリの町の壁には、いたるところで声明文(Manifeste)が貼られた。

しかも、その声明文は、同時に多くの家庭にも配布された。それには、あたかも読む人の心の中にオルレアン公の名前を刻み込むかのように、何回も彼の名がでていた。

「シャルル十世は、もはやパリに帰ってくることはできない。彼は国民の血を流させたのだから……。共和制は、われわれを恐ろしい分裂の危機に陥れるであろう。それは、われわれの国フランスと、ヨーロッパ諸国とを不和にさせてしまう。オルレアン公は、大革命の原理に忠実な王子である。オルレアン公は、決してわれわれと戦わなかった。オルレアン公は、ジュマッブ(Jemappes, ベルギーの町。一七九二年、フランス革命軍が、オーストリアとプロシヤの同盟軍を破ったところ―筆者)の戦いに加わった。オルレアン公は、市民の王である。オルレアン公は、敵の砲火の中を

物ともせず、三色旗を翻して進軍された。オルレアン公だけが、それを再びもって進むことができる御方である。われわれには他の人は必要ない。オルレアン公は、決して御自分では意思表示をされない。われわれが、希望を表わすことを待っておられる。さあ、われわれの希望を宣言しよう。そして、オルレアン公は、われわれが常に望み、期待していたように、憲章を受け入れてくれるでしょう。オルレアン公が、王位を受けるのは、フランス国民の手からである⁽¹⁾」。

この声明文は、ラフィットが計画し、ティエールが書いたと思われるもので、王制存続の必要性を説明し、オルレアン公以外にありえないことを訴えている。

三日間の戦いによって、ブルボン王朝の滅亡は、決定的になった。しかし、「七月王制」が成立するまでには、いくつかの重要な問題が残されていた。それは、(1)、王制を存続させるか、共和制にするか、(2)、もし王制にする場合、ブルボン家の傍系であるオルレアン家が王位につくのが妥当だが、果してオルレアン公は、それを受け入れるかどうか、(3)、たとえオルレアン公が承諾しても、三日間の戦いの主導権を握っていた共和派の人々は彼を認めるかどうか、等々。

まさに、こうした難問を解決し、自派の主張を有利にするため、様々な党派の人々が暗躍し、策動した。「戦いが終ると陰謀がはじまる⁽²⁾」とは、この状態を指している。

前掲のラフィット等の声明文は、こうした状況の中で、オルレアン公を王位につけ、フランスに王制を残そうという宣言であった。

当時、ブルボン家に代えて、オルレアン家のオルレアン公ルイ・フィリップを国王にもつてこようと考えていた党派を、「オルレアン派(Orléaniste)」と呼ぶ。その派は、ラフィット、ティエール、ミニエ(Mignet)ら自由主義派の代議員が中心であった。彼らは、国民の暴動を恐れ、共和制を否定していた。

「一六八八年の名誉革命(Glorious Revolution)を遂行したイギリスの例を学びたいと思っていた」⁽³⁾ 彼らは、憲章と君主制を支持していた。ただ君主制といっても、自分たちの手によって選んだ新しい国王を玉座にもってこようと狙っていた。

その派の中心人物であるラファイエットは、すでに述べたように銀行家である。「復古王制」の初めに、フランス銀行総裁として、王制の財政難を巧みに処理したが、政治的には、自由主義の立場にたち、政府の反動化に強く反対した。

ティエールは、後に、フランス「第三共和制(Troisième République)」の時、初代の大統領になった人物で、一八三〇年に、『ナショナル』紙を創刊し、ブルボン家の反動政治を攻撃した。立憲主義、自由主義の気風をもち、彼が歴史家として、大革命の自由主義思想、ナポレオンの名声を宣揚したことは有名である。

これに対して、革命の主導権を握り、労働者、学生など多くは議会に代表をもたない人々から形成されている共和派は、君主制、帝制、すべてを否定し、大革命の理想である共和制を主張していた。ただ彼らは、有力な中心者もたず、かろうじてラファイエットを崇拜していた。

大領主貴族の一人息子として生まれたラファイエットは根っからの軍人である。十六才で将校になり、アメリカの独立戦争に、義勇軍として参加しワシントンに協力、米仏両国の連合による輝かしい勝利に貢献した。一七八九年の三部会(Etats-Généraux)召集の時は、自由主義貴族として活躍し、国民議会(Assemblée nationale)では、イギリス流の立憲君主制を推進した。特に、バスチーユ陥落(prise de la Bastille)後は、パリ市の国民兵司令官(commandant)に選ばれ、国民兵(la garde nationale)を育成した。

一時ルイ十六世夫妻のヴァレンヌ逃亡事件(événement de Varennes)、シャン・ド・マルスの人民弾圧(Fusillade du Champs-de-Mars)などで人気を落したが、「復古王制」の時に、政界に返り咲き、かつてのフランスの英雄として

国民の人気を取り戻した。しかし、ラファイエット自身は、必ずしも共和制を主張していたわけではなかった。

むしろ、彼は、「もし共和制をしけば、大革命の時のように内乱になり、しかも、外国の干渉が激しくなるであろう⁽⁴⁾、ということを知っていた。ただ彼は、危険を犯したくなかっただけで、「なにをすべきかは、分らなかった。」⁽⁵⁾共和派は、このラファイエットをかつぎだしたのである。

だがラファイエットの態度が、はつきりしないままだったので、共和派としてもそれ以上進むことができず躊躇していた。

ここで、ラフィットらのオルレアン派が、一歩先んずる。パレ・ブルボンに集った約六〇名の代議員たちは、いよ

いよ声明文の通りルイ・フィリップを国王にもつてくる運動を開始した。

ティエールは、フィリップの住んでいたヌーイ (Neuilly) に行った。しかし、フィリップにはあえなかった。そこで、彼の妹であるアデレード (Adélaïde) から、「オルレアン家は、『七月革命』を支持する⁽⁶⁾」との確約を得てきた。

そして、オルレアン派は、ルイ・フィリップをフランスの王国陸軍中將 (lieutenant général du royaume) に推薦した。これは、実質的には国王への第一歩の布石であった。

その渦中の人物、ルイ・フィリップが、いかなる気持ちで、また考えで、こうした事態をみつめていたかは、後述するところであるが、「七月三〇日から三一日にかけての夜は、彼にとって、眠れない夜であっただろう⁽⁷⁾」。

フィリップは、その日の夜十一時半にパレ・ロワイヤルに入り、翌日、その榮譽を受けることを承諾した。

彼は、心の中では共和派であることを自認していた。しかし、「フランスは、今その革命的遺産である共和制にもどる準備はなされていない⁽⁸⁾」と考えていた。共和制になれば、あの一七九二年のようなジャコバン派 (Jacobins) の独裁がおこり、欧州列強国は、共和制のフランスを認めず再び戦争がはじまるだろう。

しかし、そうしたことよりもなによりも、フィリップは、自分がフランスから追放になることを恐れていた。共和

派が政権を取ったならば、王家は追放されるにちがいないからである。

ルイ十八世と同じように、長い流浪の旅に出ていた彼にとって、生涯の安住の地フランスを再び去りたくはなかった。そのために彼は、ラフィットらの代議員の招へいを選んだ。

三十一日の早朝、ルイ・フィリップは、シャルル十世が新たに任命した首相モルマル公に会見した。フィリップは彼に「私は、決して王冠をうけるつもりはない⁽⁹⁾」、「共和制を防止するため、かつ又、国王（シャルル十世）に従って君主制に奉仕するため王国陸軍中将の任命を受けた⁽¹⁰⁾」、と言った。

彼のこの言葉が、本心か、それとも、シャルル十世を安心させるためかは明確ではない。ただ、その後代議員の何人かか、又は、パレ・ロワイヤルの近所に住んでいたタレイラン（Talleyrand, 1754-1838）が、彼に「玉座をうけるように⁽¹¹⁾」と勧告した、と言われている。

同じく七月三十一日、ルイ・フィリップは、フランスのために貢献したいとの意向を込めて宣言した。

「パリの皆さん！ 今、パリに集っているフランス代議院は、私にフランス王国の陸軍中将として、この国の再建をやってもらいたいとの希望を表明しました。私は、フランス国民であるあなたがたと危険を分かちあうことに何のためらいも感じていません。いやむしろ、私は、あなたがた英雄的市民の中にわが身を投げ出し、今、フランスが直面している内乱と無政府状態の惨禍から、あなたがたを守るために、最大の努力を惜しみません。パリにもどってくるにあたり、私は、誇りをもってあなたがたが取りもどした栄光の三色旗をまとい、それをもって進む決意です。議会はまさに召集されています。議会は、法による支配（le règne des lois）と国民の権利（droits）の擁護をはかるため、真剣な討議を行うでしょう。そして、憲章も、必ず本当の効力を生じるでありましょう⁽¹²⁾」。

フィリップの宣言は、熱狂的に歓迎された。このフィリップの宣言に対して、代議院は、ただちに答えた。これには、九五名の代議員の署名があつた。

「フランス国民諸君！ フランスは自由の国である。絶対的権力は、横暴に振る舞い、専制的権力をほしいままにしたが、今や、パリの英雄的市民は、それを引きづり降した。弾圧されたパリ市民は、選挙ではえられなかった神聖な権利を武器でもって勝ちとった。専制的権力は、われわれの自由と秩序の両方を、脅かしつつあったが、われわれは今、それらを取り戻す権利をえた。もはや、われわれは、恐れる必要はない。（中略）議会は、たった今、ただフランスのために戦った一人のフランス人オルレアン公を王国陸軍中將として招へいした。このことは、議会としては、フランスおよびフランス国民を守るための、もっとも合法的、平和的、そして、緊急にして、安全な方法であると確信する。オルレアン公は、フランスおよびその憲法に献身的な御方であられる。彼は、つねにフランスの利益を守り、憲法の諸原理を守ると明言されてきた。（中略）フランス国民諸君！ オルレアン公は、すでに御自分でその決意を表明されておられる。公の言葉は、まさに、自由の国フランスにもっとも適している⁽¹³⁾」。

この両者のやりとりで、ルイ・フィリップと議会の呼吸は合った。あとに残った重要な問題は、「シャルル十世の勅令によって解散させられた議会は、暴動の街と化したパリにおいて、政治的決定権をもつ機関ではなくなっていたことであつた。むしろ、政治の問題は、パリ市庁に本拠を構え、共和制の色彩を濃くしていた市委員会の同意、承認を必要としていた⁽¹⁴⁾」。

その共和派は、断固として、新しい体制をとることを主張していた。同じ日の共和派の新聞は、激しい口調で述べている。

「フランスは自由の国である。フランスは憲法を必要としている。フランスは、臨時政府に、フランスと相談する権利以上のものは何も与えていない。フランスが、新しい選挙を通じて、フランスの意思を表明する時まで次の原則を守らねばならない。

すなわち、もはや君主制は必要ない。政府は、国民の選挙によって選ばれた代議員たちから構成される。行政権は

臨時の大統領に委任される。すべての市民は、直接的にか、間接的に、代議員の選挙に参加できる。良心の自由！もはや国教は必要ない。陸軍と海軍は、勝手に解散されることはない。フランスのあらゆる地方に、国民兵を結成しよう。憲法の保障は、国民兵に委託しよう。われわれは、われわれが生命をかけているこの原則を守るためには、必要ならば、合法的な暴力をも行使するであろう⁽¹⁵⁾。

事態は、結局、オルレアン派と共和派の争いであつたが、共和派の人々にとっては、ラファイエットがどうであるかによって自分たちのとるべき最終的態度も決まることになってゐた。

この問題を一挙に解決したのが同じ日の市庁で起こつた出来事であつた。ルイ・フィリップが突然共和派の拠点、市庁に向つて出発したのである。

午後二時頃、ルイ・フィリップを先頭にした代議員たちの行列は、勝利に酔いしれるパリ市民の群衆の中を市庁に向つた。パレ・ロワイヤルからパリ市庁まで、約一・六キロメートルの行程である。

以下ナポレオンのもとで若き将校として活躍し、その後、ルイ・フィリップの副官になり、約三〇年間彼に仕えたルミイニ(Rumigny)將軍の日記によつて、その時の様子を描いてみよう。

「オルレアン公は、市庁に向つて代議員たちと共に出発した。彼は、陸軍大將の軍服を着て馬に乗った。たちまち色々な種類の武器を持ち、武装した約十万の群衆にとりかこまれた。

ただの一発の弾丸でも彼の命を奪うことができた。群衆は、立錐の余地もなく道を埋めつくしており、一人の人さえも通るのが不可能のように思えた。その中をオルレアン公は、道をあけよとさげふ人々に導びかれ、進んで行つた。(中略)馬車に乗つたラフィット氏が、オルレアン公のあとに続いた。代議院議長も約一〇〇人の代議員に付き添われていた。市庁では、ラファイエットが迎えに出ていた。市民の歓声は、興奮に満ちていた。やがて、『オルレアン公万才！ 自由万才！ 憲章万才！』の声がおこつた。人々の顔は、喜びにあふれ、オルレアン公に接吻を送り、

拍手をした。オルレアン公は、われわれを裏切らなかった。われわれを見捨てなかった。彼だけが、誠実であった。オルレアン公は、市庁の階段を登った。私は心配だったが、群衆の歓声が私を安心させた。共和派の熱狂的興奮の中で、彼は冷静であった。オルレアン公は、やがて市庁のバルコニーに、ラファイエット將軍の手をとってあらわれた。歓声と拍手が嵐のように鳴り響いた。国民によってこのような喜びでオルレアン公が迎えられたことはなかった。まさに、嵐のあとの虹 (arc-en-ciel) であった。市庁へオルレアン公が来たことは、ラファイエットと共和派の人々にとっては、驚異であった。彼は、立派な顔をそこにあらわし、善良な市民たちに自分の姿を示した。この瞬間この国の運命は決まった⁽¹⁶⁾。

共和派の偶像ラファイエットが、ルイ・フィリップと腕を組み、しかも、フィリップが三色旗で身を包んでいる姿をみて、共和派の人々は、彼への支持を決めた。市庁前に集った人々の歓声と拍手が、「人民投票のかわりをした⁽¹⁷⁾。しかし、それは、また、「緊張がゆるむとともに、共和制のチャンスが消えていった⁽¹⁸⁾」ことを意味する。

八月一日(日曜日)、シャルル十世は、ルイ・フィリップを正式に、王国の陸軍中將として任命しようとしたが、フィリップは彼からこの任命を受けることは断った。

八月二日(月曜日)、シャルル十世は、王位を退き、彼の孫である九才のボルドー公(Duc de Bordeaux)に譲った。そして、オルレアン公を彼の摂政(régent)に任命しようとした。

八月三日(火曜日)、貴族院と代議院の合同会議が開られ、ルイ・フィリップは、シャルル十世の退位を宣言した。しかし、彼自身の即位については、触れなかった。

その日、パリの軍隊は、ランブイエ(Rambouillet)にいるシャルル十世の城に向って出動した。シャルル十世は、まだ自分の軍隊と砲兵をもっていたが、流血を避けるために、一家と共に、イギリスへ亡命していった。

八月七日(土曜日)、代議院は、次の宣言をした。それは、二つの意味をもっている。一つは、シャルル十世の退

位の確認であり、一つは、ルイ・フィリップを国王に招へいする宣言である。

「代議院は、七月二六、二七、二八、二九そして、翌三十日の事件、および、フランスが憲章を犯された結果おかれることになった全般的な状況から生じた必要性にかんがみ、他方、憲章が犯され、パリの市民の英雄的抵抗の結果として、シャルル十世（中略）が、この瞬間フランスの国土をあとにしつつあることを考慮し、事実上、また法律上、空席である玉座に、誰かが君臨することが絶対に必要であると宣言する。（中略）代議院は、フランス国民の全体的、緊急な利益のため、王国陸軍中将オルレアン公ルイ・フィリップを玉座に迎え、彼の子孫を永久に、男子の長子相続として、フランスの国王ではなく、フランス国民の王とすることを宣言する。王国陸軍中将オルレアン公ルイ・フィリップは、憲章とその修正案を遵守し、受け入れることによって玉座へ迎えらる。また、召集した両院議員の前で宣誓したのちに、フランス国民の王の称号をうけるであろう。一八三〇年八月七日代議院議決」。

これは二一九名の代議員によって採決され、貴族院で承認された。この報告を聞いた時、ルイ・フィリップは、親しい友人に、「私はこれを期待していた。両議院が国王に選出できる人物は、他にはいない。私は、関係する全ての人々の幸福のために、それを受け入れよう」ともらしたという。

八月九日（月曜日）、ルイ・フィリップの戴冠式が行なわれた。

貴族院、代議院、両院の議員が、ルイ・フィリップの招きで代議院に集った。何人かの家族および側近にともなわれて入場したルイ・フィリップは、玉座の前の壇上にある定められた彼の席に着いた。両院議員は、脱帽して起立している。

フィリップは席に着くと、両院の議員に言った。「皆さん、腰かけて下さい」と。そして、代議院議長に、「代議院議長、どうぞ、議院の宣言（déclaration）をお読み下さい」と言った。議長は、それを読み上げ、フィリップに渡した。彼はその宣言を、内務省（ministère de l'intérieur）の臨時委員（Commissaire provisoire）に回した。

次に彼は、貴族院議長に、「どうぞ、貴族院の承認の証書(acte de la approbation)を私にお渡し下さい」と云った。議長は、その写しをフィリップに渡した。フィリップはそれを、法務省(ministère de la justice)の臨時委員にあげた。そして、フィリップは、自分の国王としての受諾書(acceptation)を読み上げた。

「貴族員および代議員諸君！ 私は、代議院の宣言と貴族院の承認の証書を慎重に読みました。私は、すべての条項を熟慮し、思索しました。私は、留保も、条件もなく、この宣言の中に含まれている条項と義務を受け入れ、そして私に与えられているフランス国民の王という称号(Le titre de roi des Français)を受諾します⁽²²⁾」と。

次にフィリップは、起立し、帽子をとって、宣誓を行なった。

「神の御前において、私は宣言の中で述べられている修正された憲章を忠実に守り、法律により、法律に従ってのみ統治し、また、各人の権利にもとづき、互に正義を貫かせ、フランス国民の利益、幸福、栄光のために全力をつくすことを宣誓する⁽²³⁾」と。

法務省の臨時委員は、ペンを、ルイ・フィリップに渡した。彼は三つの原本に署名した。王国の記録文書(archives)両議院の記録文書、以上三つのためである。

その時、国王万才！ 国王万才！ との祝福が、一千回繰り返えされた。それが終ると、フィリップは、次のように演説した。

「貴族院および代議院議員諸君！ 私は、たった今、偉大なる行為をなし終えました。私は自分のやらなくてはならない使命を深く感じております。私は、それをやり遂げる決意です。(中略)私は、国民の意思からなる玉座を、決して私物化し、濫用しません。フランスは、今、自由が攻撃され、秩序が破壊され、憲章が犯されています。法律の機能を再び回復させなくてははいけません。それに従事するのは、両院議員である、ということを知っております。

(中略)私は、フランスが国内では幸福になり、外国からは尊敬されることを望んでいます。そして、ヨーロッパの平

和が強化されることを祈っております⁽²⁴⁾」。

法務省の臨時委員は、両院議員にそれぞれの議場へ戻るように告げた。議員たちは、それぞれの議場で、国王への忠誠と、憲章への服従と、フランスの諸法律の遵守とを誓約した。

フィリップは、フランス国王の象徴である「王冠⁽²⁵⁾ (la couronne)」、笏⁽²⁶⁾ (le sceptre)、劍⁽²⁶⁾ (le glaive)、正義の手⁽²⁶⁾ (la main de justice)」をうけた。そして、彼は、「フランスの国王、フィリップ七世⁽²⁶⁾ (Philippe VII)ではなく、神の栄光と国民の意思によるフランス国民の王、ルイ・フィリップ一世⁽²⁶⁾ (Louis-Philippe I^{er})」と誓約書に署名をした。

彼は、オルレアン家の家系からいえば、フィリップ七世になる。フィリップ六世は、一三二八年から五〇年までフランスの国王であった。しかし、あえて、彼がルイ・フィリップ一世と名のつたことは、彼が、「玉座は大革命の原理にもとづいている⁽²⁷⁾」ということを示したためである。

また、彼が、「フランスの王ではなく、フランス国民の王」と宣言したのも、彼が、「復古王制」の国王よりも、より市民的であり、国民が国王に属しているのではなく、国王が国民の合意の上に成り立っているということを示そうとしたためである。

ルイ・フィリップ一世は、このようにオルレアン派と共和派の競争の中から誕生した。一番驚いたのは、「共和制を作るつもりだったのに、ブルジョワ的な王制を産みだしてしまった⁽²⁸⁾」人々であろう。彼らは、自分たちでもどこが間違っていたのか気がつかなかった。

- (1) John Hall Stewart, *The Restoration Era in France, 1814-1830*, p. 169.
- (2) 井上幸治責任編集『ブルジョワの世紀』(『世界の歴史12』中央公論社版所収)二〇九頁。
- (3) John H. Stewart, *op. cit.*, p. 61.
- (4) John H. Stewart, *op. cit.*, p. 63.
- (5) Guglielmo Ferrero, *The Principles of Power—The Great Political Crises of History*, tr. by T.R. Jaekel, New

York, Putnam's Sons, 1942. IX-333 p. 右手健一訳『権力論(上)』103頁。

- (9) P. Beik, op. cit., p. 27.
- (7) P. Beik, op. cit., p. 28.
- (8) John H. Stewart, op. cit., p. 62.
- (6) P. Beik, op. cit., p. 28.
- (10) 忠告院編輯「○戸冊」。
- (11) P. Beik, op. cit., p. 28.
- (21) John H. Stewart, op. cit., p. 172. 原文は「Jérôme Mavidal, Émile Laurent, and others, Archives parlementaires de 1787 à 1860. ser. 2, V. 61, pp. 644-645.
- (31) John H. Stewart, op. cit., p. 173. 原文は「Duvergier, Jean B. Collection complète des lois……de 1788 à 1830, 2nd ed., 106 vols. (Paris, 1834-1906) V. 19, pp. 3-4.
- (14) J.P. T. Bury, France, 1814-1940, p. 45.
- (15) Irene Collins, Government and Society in France, 1814-1848, p. 88. 原文は「Tribune des Départements, 31 juillet 1830.
- (16) P. Beik, op. cit., pp. 114-115. 原文は「Général Comte Marie Théodore Gueilly de Rumigny, Souvenirs……Paris, Émile-Paul Frères, 1921, pp. 236-243, abridged.
- (17) Malet et Grillet, op. cit., p. 69.
- (18) P. Beik, op. cit., p. 29.
- (19) 参事院の議案は「ハイ・フエリッブ」が王座に上る時八月七日に代議院で議決された。
- (20) P. Beik, op. cit., pp. 117-118. 原文は「Chambre des Députés; Session 1830; Impressions. Vol. I, No. 3, pp. 1-7, abridged.
- (12) John H. Stewart, op. cit., p. 176.
- (22) P. Beik, op. cit., p. 119.
- (23) P. Beik, op. cit., p. 119.
- (24) P. Beik, op. cit., p. 120.
- (25) Malet et Grillet, op. cit., p. 72.

- (26) J.P.T. Bury, op. cit., pp. 46-47.
 (27) P. Beik, op. cit., p. 30.
 (28) André Maurois, Histoire de la France. 平岡・中村・山上共訳『フランス史(下)』四八一頁。

四、ルイ・フィリップ

前項までは、主として「栄光の三日間」を通して、国王ルイ・フィリップ一世が誕生するまでの過程について論述してきた。しかし「七月王制」の成立を更に深く理解するためには、ルイ・フィリップ自身のことについても触れなくてはならない。

「七月革命」によって五七才のルイ・フィリップに突然チャンスがおとずれた。フランス国王になるか、それとも今まで通り一貴族で終るか、である。彼は、国王の道を選んだ。

「いかなる考えのもとに、彼が国王への道を選択したのか、それを知ることが、不可能である。ただ彼の経験と、彼が直面した状況を検討して、それを探るしかない⁽¹⁾」。歴史は、人間に光をあてないと輝きを増さないものである。

ルイ・フィリップ像

フランスの著名な歴史家であり、『アメリカの民主制 (La Démocratie en Amérique 1835)』を著したトックヴィル (de Tocqueville, 1805-1859) は、ルイ・フィリップを次のように描いている。

「彼は、ヨーロッパの名門の貴族の中でも特に高貴な家系の出身であった。だが彼は、そのことからくる傲慢さを自己の精神の中に覆いかくした。しかし、心の中では、自分のような人物は他にいないという自信を常に懐いていた。

彼はまた、非常に質素ではあったが、欠陥ももっていた。彼の生活は、平凡で、家族も一般市民と同じような生活習慣を身につけていた。彼は、秩序正しく、質素で、やさしい性質であった。法律を守り、極端なことを嫌い、誇張めいたことは避けた。また、感情的にならず、貪欲ではなかった。燃えるような情熱がないかわりに、破滅するような脆さも、目立った悪もなかった。国王らしき徳、すなわち、勇気があった。

彼は、非常に礼儀正しかった。その礼儀は、国王としてのというよりも、商人のそれであった。彼は、文学とか、芸術とかは理解しなかった。実業関係と熱心に取組んだ。彼の記憶力は、拔群であり、詳細に物事を覚えていた。

彼の会話は、冗長で、飛躍的で、独創的であった。そして内容はあたりまえのことであり、逸話や、ささいな事実が多かったが、ぴりっとした味をきかせた意味のあることを含んでいた。(中略)彼は、人間について深い知識をもっていた。彼は、人間をその本質は悪であるという面からのみみていた。彼は、十八世紀流の宗教的な事柄については、無神論者であり、十九世紀風の政治における懐疑論者であった。彼自身、自分の信念をもっていなかった⁽²⁾ので、他人のそれを理解しようとはしなかった。

また、レミューザ (Comte de Rémusat, 1797-1875. フィリップと同時代の議会の改革を要求した野党の代議員) は、次のように述べている。

「ルイ・フィリップは、中背で、体格はがっしりしていて、機敏、活動的、身軽であった。しかし、スタイルは、少し悪かった。胸が長かったからである。容貌は、普通だが、大きい顔をしていた。(中略)彼のまなざしは、すぎがないというよりすばやい感じと、善良な、陽気な感じを与えていた。彼のワシ鼻は、彼の顔の中でももっとも気高く、王朝風の印象を漂わせていた。彼の口は、表現力に富み、決活で、コメディ劇場でもやっていけそうである。彼の容貌は全体として彼の話し方を表わしているようである。陽気で、活発で、善良なはずらっぽさをもち、うれしそう⁽³⁾な、うちとけた、明るさを示している。そして、大事な時には、燃え上るような英雄的な情熱を表わすというより

も、勇気のある冷静さを示した。(中略)彼の話し方、身振り、そして人々の前にみせる態度は、威厳ぶったところはない。彼の会話の中には、たとえば彼が国王でなくても何かを人に感じさせる人格がにじみでていた。彼の誕生と習慣が重要な状況に対処しうる人間を形成した⁽³⁾。「彼は、イギリスの憲法を完全に理解していたわけではなかった。彼はそれを非常に君主国的な意味で解釈し、その憲法がフランスに適しているかどうか、フランスにとってはその憲法は、あまりに共和制的すぎるのではないかと疑った⁽⁴⁾」。そして、ルイ・フィリップの「寛大⁽⁵⁾と情深さは底知れなかった⁽⁶⁾」という。

また、歴史家エミール・ブルジョア (Émile Bourgeois) は、次のように述べている。(The Orleans Monarchy)

「彼は、家系の伝統からうけた自由、教養によって培われた自由、もともとの気質からの自由⁽⁶⁾の精神をもっており、彼の素朴な親切な態度は、国王というよりも、市民的な行政官 (a popular magistrate) を思わせた⁽⁷⁾」と。

以上三人の思想家、政治家、歴史家によるルイ・フィリップ像を紹介したが、こうしたイメージをもつルイ・フィリップはいかなる体験と状況の中から誕生してきたのであろうか。

オルレアン家

思えば、一七八九年、フィリップが十六歳の時から、一八三〇年五七才の時までの亡命生活はあまりにも長い。ルイ・フィリップは、一七七三年の生まれだから、オーストリア宰相メッテルニヒ (Metternich, 1773-1859) と同じ年である。メッテルニヒが欧州を舞台に輝やかしい栄光の歴史を刻んでいる間、フィリップは、欧州、アメリカを転々とする亡命者であった。

オルレアン家 (Orléans) は、もともとフランス貴族の旧家である。起源は、フィリップ六世 (Philippe VI, 1293-1350)

の時にできたオルレアン公領に由来する。その後、王室近親の四家系に分れるが、「七月革命」で国王になったルイ・フィリップの家系は、ルイ十三世 (Louis XIII, 1601-1643) に始まる。その息子フィリップ二世の兄がフランス絶対主義を代表する専制君主、「太陽王 (le Roi Soleil)」とよばれたルイ十四世 (Louis XIV, 1638-1715) である。ゆえにオルレアン家は、ブルボン家の傍系にあたり、続く、フィリップ三世 (Philippe III, 1674-1723) は、幼くして即位したルイ十五世 (Louis XV, 1710-1774) の摂政になったほどである。

しかし、オルレアン家は、ブルボン家の傍系であるだけに、その子孫たちは、絶えず国王の王位を要求する者 (pretendant) とみなされてきた。事実、「その時その時の政治体制に不満を持っている人々は、オルレアン家の周りに集って来た」⁽⁸⁾。

それが頂点に達したのが、国王ルイ・フィリップの父、フィリップ平等公ルイ・フィリップ・ジョセフ (Philippe Egalité, Louis Philippe Joseph, 1747-1793) の時である。

フィリップ・ジョセフは、父の死後すぐに、一七八五年オルレアン公の称号を受けた。三五才の彼は、背は高く、知性的であった。だが、反面、怠惰で野心的であった。彼は軍人として出世を望んでいたがそれは拒否された。

「マリー・アントワネット (Marie-Antoinette) は、彼を嫌い、彼も又、彼女を嫌悪していた」⁽⁹⁾といわれる。やがて、革命の自由主義思想に染まり、ブルジョアジーに同情的になっていった。

一七八七年十一月十九日、国王の臨席している会議 (séance royale) で、彼は、高等法院 (Parlement) が、国王の圧力によって違法な手段で、国家の財政をごまかしていると追及した。国王ルイ十六世は、烈火のごとく怒って、「よろしい、それは、合法的行為である。なぜならば、私がそれを望んだのだから……」⁽¹⁰⁾と叫んだ。この頃から絶対王制と高等法院の間は分裂していった。

オルレアン家は、もともと富裕な財産家であったが、フィリップ・ジョセフは、矢張り富裕な妃と結婚したので財

政的にはゆとりがあった。三人の男子 (Louis Philippe, Montpensier, Beaujolais) と一人の女子 (Adélaïde) の四人の子供に恵まれ、家はパリの、パレ・ロワイヤルであった。

その家は、国王の住んでいたチュイルリー宮殿の近くにあり、一般市民に解放され、彼の気さくな態度は、多くの人々を出入りさせていた。そのために、彼の家は、反政府運動の中心ではないかと疑われていた。

そして、フィリップ・ジョセフは、一七九二年、国民公会の一員として、国王ルイ十六世の裁判の時、死刑の方に賛成投票を行った。以来、オルレアン家は、「いとこ殺し (cousin killer)」の汚名を長くかぶることになるのである。

人間形成

ルイ・フィリップは、一七七三年パレ・ロワイヤルで生まれたが、八才の時から「強靱な精神力をもち、野心的な、そして現実主義的な女性⁽¹¹⁾」の影響を受けることになった。

その女性は、ジャンリス夫人 (Mme. Genlis, 1746-1830) といい、地方貴族の娘で、女流作家であった。彼女は「美しく、活発で、陽気、そして、心の優しい女性で、ルソー (Rousseau)、タレーラン (Talleyrand)、シャトブリアン (Chateaubriand) 等と友達で、ナポレオンは、彼女を魔女 (enchanteuse) と呼んだ⁽¹²⁾」。彼女は、フィリップの父とも愛人関係にあり、自分の将来を安定させるためにも、フィリップを説得して、彼の子供たちの家庭教師になっていた。「なぜか彼女は狩猟だけはのぞいて⁽¹³⁾」、その他のあらゆる運動を子供たちに教えた。朝六時から夜十時まで、子供たちは、数学、科学、商業取引、歴史、文学、語学を習った。特に語学については、朝と昼はドイツ語、午後は英語、夕方はイタリア語、そして時々、スペイン語を学んだ。彼女は子供たちに、「勇敢な、主体性のある人間になることを望み、決して理想的な、夢を追う人⁽¹⁴⁾」にならないように訓練した。

子供たちの中でも、彼女は、ルイ・フィリップについては、「体の大きい、まじめな、幾分臆病な少年⁽¹⁵⁾」と評価していた。

彼女のスパルタ訓練を通して、フィリップもやがて、肉体的にも精神的にも頑健になり、「一生懸命働き、人々にあい、必要な時には人に命令をする」⁽¹⁶⁾ことも覚えた。彼女の教育方法は、決して単なる学問の教授だけではなく、生きた現実の中で、人間としての力を発揮させようという鍛練であった。

こうして、フィリップは、思慮深い、勤勉な、そして良心的な青年に成長した。彼女は、最後まで彼に、「勇気のあるしかも知性的な指導者にしよう⁽¹⁷⁾」と努力をしたという。

フランス大革命

彼が青年期の頃、革命の嵐が吹きあれて、彼の父フィリップ・ジョセフも、その波の中に巻き込まれていった。フィリップ・ジョセフが、革命派に加わった理由は、「彼の名前と財産を利用されたのだ⁽¹⁸⁾」と噂された。

一七八九年十月六日、彼が十六才の誕生日を迎えた時、フランス革命史上有名な民衆が国王と議會をヴェルサイユからパリに移す事件がおこった。十月六日午前六時、ヴェルサイユ宮殿になだれ込んだ空腹と怒りにみちた民衆は、もう少しで国王と王妃マリーアントワネットを殺害するところであった。

この事件のあと「フィリップ・ジョセフがこの事件を扇動したのではないか⁽¹⁹⁾」と疑われた。たとえその証拠はないにしても、オルレアン家は、このようにブルボン家に不幸があれば、先づ利益をえる立場にいたため、たえず嫌疑をかけられた。国王ルイ十六世も、この時、彼を疑い、イギリスへ監視をつけて派遣してしまった。

しかし、一七九〇年、フィリップ・ジョセフは突然国王の許可なしに帰国した。この頃息子ルイ・フィリップは

ジャコバン・クラブ (Club des Jacobins) に加入した。「母は反対したが、父とジャンリス夫人は認めた⁽²⁰⁾」。当時のジャコバンクラブは穏健な立憲王党派の集りであった。又、ルイ・フィリップは、軍人としても力を発揮し、竜騎兵 (dragon) の陸軍大佐になり功績をあげた。

一七九二年八月十日、王権が停止され、王制が倒れた。立法議会は、ここでみづから解散し、かわって、九月に国民公会 (National Convention) が成立し、王制の廃止、共和制樹立の宣言がなされた。フィリップ・ジョセフは、この時、国民公会のメンバーに選ばれ、急進的な山嶽派 (Montagnards) の代議員席に坐った。フィリップ平等公という名前は、その時彼につけられたものである。

ルイ・フィリップは、この頃、バルミー (Valmy) の戦い (一七九二年九月二十日北フランスのバルミーでのオーストリア・プロシヤ連合軍とフランス市民義勇軍の戦い)、ジエマップの戦いに参加し、勇名をとどろかせた。彼は、「自分自身を平等將軍 (Général Egalité) と呼んだ⁽²¹⁾」。ルイ・フィリップ、十九才の時である。

パリでは革命が進み、新しい革命的英雄ダントン (Georges J. Danton, 1759-1794) が脚光を浴びてきた。しかし、ダントンは革命が進むうちに「オルレアン家にやとわれているのではないか⁽²²⁾」と疑われた。なぜならば、「革命が極端なところまで進むよりも国内が安定することによりも望んでいた⁽²³⁾」彼は、ルイ十六世が、死刑執行の危険にさらされた時、「ヨーロッパとの平和を結ぶ上でも王制は残しておかなくてはならない⁽²⁴⁾」と主張し、そのために彼は、もしブルボン家が倒されたら、国王には「フィリップ・ジョセフ、または、息子のルイ・フィリップ⁽²⁵⁾」をもってくるのが正しいとさげんでいたからである。「フランスは立憲君主制が妥当である⁽²⁶⁾」というのが彼の結論である。

ダントンは、一七九二年九月、ルイ・フィリップが戦場からいったんもどってきた時、彼に「輝やかしい軍事的記録を残しておくように助言した⁽²⁷⁾」。王制存続のためには神話が必要であった。

ルイ・フィリップに目をつけていたもう一人の人物は、デュムーリエ將軍 (Dumouriez, 1739-1823) である。フィリップ

プの上官である彼は、国民公会に反対し、王制を存続させ、ルイ・フィリップを君臨させようとした。

彼は、最初は革命軍として戦っていたが、一七九三年四月、突然、反革命軍に転じた。しかし、失敗してオーストリア軍に助けを求めた。ルイ・フィリップも彼に従ってオーストリアに行ったが、そのために父母をはじめ家族は革命軍に捕われてしまった。

それより前、ルイ十六世の裁判の時、ルイ・フィリップは父に、「自分たちの親戚である国王が裁かれるこの会議には出席しないように、また出席しても投票しないように忠告して」戦場に向った。⁽²⁸⁾しかし、父は、いとこの死刑に賛成投票をし、彼自身が恐怖政治の時に処刑（一七九三年十一月）されるまで、オルレアン家は汚名をかぶることになったのである。

亡命生活から復古王制へ

オーストリアへのがれたルイ・フィリップは、その後スイスへ行った。彼は、ライヘナウ（Reichenau）大学で「語学と数学の教授となり、名前もシャボー（Chabaud）とかえて、月一四〇〇フランの報酬をえていた」⁽²⁹⁾。彼が、一七九三年十一月、父の死を知ったのはその地においてであり、同時に、オルレアン公の称号を引き継いだ。

やがて彼は、その学校の女召使いとの恋愛事件に巻き込まれ、再びドイツ、スカンジナビア、そして、アメリカへの旅に出発せざるをえなくなった。フィリップが、アメリカにいたのは、一七九六年から九九年までで、その後スペインにいた家族と合流し、一八〇〇年一月イギリスへ渡った。

イギリスでは丁度ルイ十八世になるはずのプロヴァンス伯と同じ様に、イギリス政府から毎年年金をもらって生活していた。彼の場合は年五万フランだった。ルイ・フィリップは、その頃にはやはり不幸な状態にあるブルボン家に

同情し、「プロヴァンス伯と王制復古について相談したりしていた」⁽³⁰⁾。

一八〇九年十一月、彼は、シシリ島の国王の娘マリ・アメリー(Marie Amélie)と結婚する。彼女は、ルイ・フィリップの人柄を知っていたが、彼女の母は故フランス王妃マリー・アントワネットの妹であったため、フィリップ平等公の息子との結婚には反対した。

シシリ島は、スペイン系のブルボン家支持者が多かった。フィリップは、その母に「自分は、ブルボン家の転覆を企てるつもりは全くない」⁽³¹⁾と誓い、やっと結婚を許された。

一八一四年、王制復古の時、ルイ・フィリップはフランスに帰国した。だがすぐに、ナポレオンがエルバ島から帰還したため、フィリップは、家族をロンドンに避難させ、自分は国王の命令でフランスに残った。ナポレオンの敗北が決定的になった時、彼は、ロンドンの家族のところに行くことを許された。

この時、「ロシアのアレクサンドル皇帝(Alexandre I)は、ブルボン家とオルレアン家を取りかえようとした」⁽³²⁾といわれる。ルイ十八世として即位したプロヴァンス伯も、ルイ・フィリップを疑い、ロンドンから、急ぎよ彼を呼び戻し「ブルボン家への忠誠を誓わせた」⁽³³⁾。

第二次復古王制(Le seconde Restauration)のあと、ルイ・フィリップは、ルイ十八世から貴族に列せられた。しかし彼の周りには自由派の代議員があつまり、彼自身も反動の空気を好まず、貴族院で政府を批判する演説を行った。

「反動政治には断固反対である。しかも超王党派の暴力には賛成できない」⁽³⁴⁾と言って彼は、一八一五年十月以降二年近くイギリスに滞在しフランスにはもどらなかった。「政府の行為に賛成できない場合は、不在であることが最も良い」⁽³⁵⁾と彼は書いている。

一八一七年彼はパリに戻った。だが政治とは全く関係なしに暮らしていた。友人のラファイエット、フォイ(Foy)將軍、ラファイット、詩人ベランジェ(Beranger)などが彼の家に出入りしていた。

だがルイ・フィリップに嫌疑がかかる事件がまたも起った。一八二〇年九月、アルトア伯（シャルル十世）の子供でブルボン家の跡継ぎといわれていたベリー公（Duc de Berry）が刺殺されたのである。犯人は、ルーヴェル（Louvel）という熱狂的なボナパルト派の馬具工であつた。しかし、当時は、「ベリー公の暗殺は、オルレアン派の陰謀である」と騒がれた。

このようにオルレアン家は、ブルボン家の傍系という地位にありながら、革命の嵐の中でたえず疑惑の目でみられ、フィリップ自身もこうした時代の波をかぶりながら亡命と栄光の波間を浮き沈みしていたのである。

しかし、ルイ・フィリップが復古王制の間一番力を注いでいた仕事は、政治的なものではなく父の事業の再建である。革命によつて、オルレアン家の財産は、壊滅状態になつた。彼はその状態から懸命に弁護士の力を借りたりして財産のたて直しを計っていたのである。

オルレアン家の家族は、仲が良かった。フィリップは五人の息子と三人の娘をもっており、妹のアドレードもいっしょに住んでいた。彼の事業力、生活面でのまじめさ、気品、愛想のよい親切さなどがブルジョアジーの共感をよんだ。子供たちは、公立の中学校に通つた。「これはフランス王室史上はじめてのことである」⁽³⁷⁾。

ルイ・フィリップは、「オルレアン派という党派の存在を認めなかつたけれども、自然のうちにフィリップの周りには人々が集まつてきた」⁽³⁸⁾。そして、憲章によつて、王制と革命の原理を和解させようとして出発したブルボン家の復古王制が失敗だとわかつてくると、オルレアン家と交代させて、再度王制を存続させようという運動が活発になつてきた。ルイ・フィリップも知らず知らずのうちにその運動の中に巻き込まれて行つた。

七月革命

さて、ルイ・フィリップは、「七月革命」をどのように考えていたのであろうか。この点について、当時の彼の姿を端的に描いているのが、彼の三男、ジョワンヴィル (Joinville, 1818-1900) の回想録 (souvenirs) である。ジョワンヴィルは、その時十二才の少年であった。

「われわれが、ヌーイ (Neuilly) に帰ったのは、一八三〇年七月二五日である。翌二六日、ヌムール (Nemours, 次男) と私が、学校へ行く準備をしていると誰かがドアを開け、家庭教師に向って叫んだ。『政府の緊急通告が『モニトゥール』紙にでているよ』。何だって?、『そうだ! 勅令が発表されているんです』それを聞くや家庭教師は、家族のいる居間に走っていった。われわれも、彼のあとを追った。居間には父が『モニトゥール』紙を手にして敗残者のような格好で坐っていた。父は、家庭教師をみると絶望したように肩をすくめた。母が、『何がおこったんでしょか?』と心配そうにたづねた。しばらく沈黙が続いてから父は、『彼らは狂っている』とだけつぶやいた。そして、『彼らは、われわれを再び亡命させる気だ。おゝ! 私は、すでに二回も亡命してきた。私はもういやだ。私は、フランスにいたいのだ』と叫んだ。そして、まもなく父は、ヌーイから消えていった⁽³⁹⁾」。

フィリップは、四箇の勅令は当然政府の無暴な行為であり、必ず国民の反抗を招くことを予想していた。ジョワンヴィルは続けている。

『七月革命』は、確かに不幸な出来事であった。それは、君主制の原理に打撃を与え、革命によって利益を得ようとする投機師 (spéculateur) たちを昌険に駆りたてた。しかし、私は父は革命を望んでいなかったと確信する。父は革命がおこった時、深い悲しみに沈んでいた。シャルル十世が失脚する時、父は、全く彼を救えなかった。むしろ自分もまた、追放されるのではないかと心配していた。父は、フランスにおいて幸福な生活を送りたいと願っていた。私は、しばらくして、父がパリにいるということを知った。そして、父がまだ漠然とはしていたが、何やらフランス国民の利益のため、何かをしなければならぬ立場におかれていることを知った⁽⁴⁰⁾。ジョワンヴィルはこうして、七月三一

日、革命の余波が残るパリの中をパレ・ロワイヤルに行く。

「……戦いは終り、フランスは武力によって一つの体制から他の体制へ移りかわりつつあった。父は、その新しい運動と協力することによってのみ、亡命からまぬがれることができることを知った。そして、当初彼は、ボルドー公をアンリー五世として玉座にすえることによって、ブルボン王制の再建を計ろうとした。しかし、それが不可能となると彼は、自分を支持してくれた人々の熱意に服し、玉座に上る決意をした。父は、自分こそが共和制から独裁制へ進み、欧州列強の侵入を受けて再び敗北する危機からフランスを救える唯一の人であると確信して、玉座に坐ったのである⁽⁴¹⁾」。

ジョワンヴィルの回想録が出版されたのが一八九四年、彼が七六才の時である。子供の純粋な心に映った当時の状態を、その後の歴史の変遷の中で分析し、昇華したこの記録は、かなり正確な描写といえよう。

ともかく、ルイ・フィリップは、最初はとまどった。自分は少しも働きかけなかったのに、突然フランスの国王という名誉と地位が眼前に降りてきたからである。当時の彼は、大革命によって失ったオルレアン家の財産を取り戻すことに懸命であったことはすでに述べた通りである。

ただ彼は、表面的には、いかにもブルジョアジの顔をしていたが、「決して自分が王家の傍系であることは忘れなかったし、貴族である誇りは、失わなかった⁽⁴²⁾」。また、「自分は、シャルル十世やルイ十八世と同様に、一般市民より優越した存在である⁽⁴³⁾」ことは疑わなかった。この意識が、ブルボン家の崩壊という思いもかけない現実に直面して、表面にあらはれた。「彼は、玉座を憧れていたが決して陰謀はめぐらせなかった⁽⁴⁴⁾ (he aspired to but never conspired for the throne)」との指摘が適切である。

ウィーン体制 (Wiener System) のもとで反動の気運がみなぎっている欧州大陸にあって、フランスが共和国になることを当時の大国が承認するはずはない。王制を存続させるならば、すくなくとも問題はフランス国内で解決でき

る。ゆえにブルボン家にかわってオルレアン家をもつてくることが、妥当であった。

ルイ・フィリップにしても、彼が五七才の時まで経験してきたことは、フランス大革命、諸党派の流血の争い、恐怖政治(Terror)、そして欧州戦争、そうした状況の中での自分自身の亡命生活などであった。この経験が何よりも彼をして、「秩序を好み、平和を愛し、国内を平静に保とうとする人にさせた⁽⁴⁵⁾」のは当然であろう。彼が本来もっていた国王への可能性という自負と、フランスの思いもかけない状況がルイ・フィリップをして国王になる決意をさせたのである。

しかし、「フランス国民の王」といわれた彼も、長い不幸な経験からくる現状を維持しようという姿勢と、自己保身の態度はぬぐいされなかった。

「彼は、国王の宣誓をする前に、自分の財産をすべて子供たちに譲渡してしまった。その結果、財産はフィリップ自身の所有ではなくなった⁽⁴⁶⁾」。こうしておけば、いつ自分が玉座を追われても、自分の築いたオルレアン家の財産は失われることはないからである。

ルイ十八世とシャルル十世は、立憲君主制の原則である国王の国民への愛と国民の国王への信頼を踏みにじってしまった。とくに、シャルル十世は、政争の頂点にたつて、自分の利益を守ろうとした。ルイ・フィリップの課題は、この復古王制の失敗の教訓をどこまで深く、認識できるか、であった。

- (1) P. Beik, op. cit., p. 8.
- (2) P. Beik, op. cit., pp. 133-134. 原文は 'The Recollections of Alexis de Jockueville. Translated by Alexander Teixeira de Mattos and edited with additions by J.P. Mayer, pp. 4-5.
- (3) P. Beik, op. cit., p. 132. 原文は 'Charles de Rémusat, Mémoire de ma vie. Vol. III.
- (4) P. Beik, op. cit., p. 132.
- (5) P. Beik, op. cit., p. 133.
- (6) John H. Stewart, op. cit., p. 171.

- (7) John H. Stewart, op. cit., p. 171.
- (8) P. Beik, op. cit., p. 10.
- (9) P. Beik, op. cit., p. 10.
- (10) P. Beik, op. cit., p. 10; Albert Soboul, *la Révolution française, 1789-1799*. 小堀義・渡辺共訳『フランス革命一七八九―一七九九年(上)』大正風堂参照。
- (11) P. Beik, op. cit., p. 12.
- (12) Encyclopaedia Britannica, article "Genlis, Stéphanie Félicité Du Crest De Saint-Aubin" Volume 10, 1964.
- (13) P. Beik, op. cit., p. 12.
- (14) P. Beik, op. cit., p. 12.
- (15) P. Beik, op. cit., pp. 12-13.
- (16) P. Beik, op. cit., p. 13.
- (17) P. Beik, op. cit., p. 13.
- (18) P. Beik, op. cit., p. 13.
- (19) P. Beik, op. cit., p. 13.
- (20) P. Beik, op. cit., p. 13.
- (21) P. Beik, op. cit., p. 14.
- (22) P. Beik, op. cit., p. 14.
- (23) P. Beik, op. cit., p. 14.
- (24) P. Beik, op. cit., p. 14.
- (25) P. Beik, op. cit., p. 14.
- (26) P. Beik, op. cit., p. 14.
- (27) P. Beik, op. cit., p. 14.
- (28) P. Beik, op. cit., pp. 14-15.
- (29) Malet et Grillet, op. cit., p. 75.
- (30) P. Beik, op. cit., p. 16.
- (31) P. Beik, op. cit., p. 17.

- (32) Malet et Grillet, op. cit., p. 75.
- (33) P. Beik, op. cit., p. 18.
- (34) Malet et Grillet, op. cit., p. 75.
- (35) Malet et Grillet, op. cit., p. 75.
- (36) P. Beik, op. cit., p. 19.
- (37) P. Beik, op. cit., p. 20.
- (38) P. Beik, op. cit., p. 21.
- (39) P. Beik, op. cit., p. 112. 原文は Prince de Joinville, Vieux souvenirs, 1818-1848, 1894, pp. 41-51.
- (40) P. Beik, op. cit., pp. 112-113.
- (41) P. Beik, op. cit., p. 113.
- (42) John H. Stewart, op. cit., p. 62.
- (43) Malet et Grillet, op. cit., p. 76.
- (44) John H. Stewart, op. cit., p. 63.
- (45) P. Beik, op. cit., p. 171.
- (46) John H. Stewart, op. cit., p. 63.

五、結　　び

「七月革命」の意味するものは、何であつたのだろうか。

デュヴェルジエ (Maurice Duverger) は、その政治的性格として、「体制の変化というよりも王朝の交代の問題である (Il s'agit d'un changement de dynastie plutôt que d'un changement de régime)⁽¹⁾」と指摘し、ジャン・ロダ (Jean Lhomme) は、「単に置換が、つまり、支配階級の交代があつたということである。七月革命まで支配していた階級は土地貴族であつた。七月革命以後、それは大ブルジョア⁽²⁾である」とその社会的性格を挙げている。

一方、B・クロッチェ (Benedetto Croce) は、自由主義史観の上から、「七月革命とは何であったか。二、三の歴史家が定義しているように、それは、もしシャルル十世がポリニヤックのいいなりになっていなければ……さけられた過失の結果だったのか。……あるいは、他の歴史家が考えているように偶然の事件だったのか……。このような抽象的可能性の上に空中の樓閣を築ることはそれだけの理由で反駁済みである。実際におこったことのみが現実である。……すなわち、それは自由主義と絶対主義の間でさまざまなリズムと形をもって長年つづいてきた闘争が武装衝突した瞬間である……。これによって自由主義は活力を増し、絶対主義は活力を減少していくのである⁽³⁾」と述べている。

これらの見解は、それぞれの立場からするそれなりの「七月革命」に対する評価である。こうした中でも、特に、「七月王制」の成立とその政治的周辺をめぐる主要な問題の一つとして、いわゆる「正統性 (legitimite)」の問題が挙げられる。

急進的な共和派の勢力によって火ぶたが切られた「七月革命」は、結果的には、大ブルジョアジーを中心とする政治家―代議員によって、その成果をさらわれる形になってしまった。

代議員たちが共和派をおさえて、ルイ・フィリップを国王にするためにとった手続きは、表面的には、極めて民主的であった。すなわち、代議員が集って議員会を開き(七月三〇日)、ルイ・フィリップをまづ、王国陸軍中將に任命し(七月三一日)、シャルル十世の退位(八月二日)の後に、彼を国王に招へいし(八月七日)、貴族院、代議員、両院合同の会議で正式にフランス国民の王として承認した(八月九日)。

しかし、こうして成立した「七月王制」をオーストリア宰相メッテルニヒは、痛烈に批判している。

「八月九日の君主政治は、崩壊した玉座にかわって、王位に即いたのであった。その情況は健全なものであろうか？ 全く、そうではない。それは、一において、普通選挙の権威を欠き……他において、それは歴史法則の強力な援助を

得ていない……それは、共和国の一般民衆の支持を欠き……ブルボン家の正統性原理の支持を欠き……それは、世襲権にも、国民の選挙にも、そのいづれにも発していないのである。あらゆる権利を無視して、扇動的な革命議会は、ルイ・フィリップを国王に任命した⁽⁴⁾と。

これらの指摘は鋭いものである。それゆえ、メッテルニヒは、ルイ・フィリップの政府は、「不定の存続と云えるなら、一日の存続と云ってもよいであろう。なんらかの評価を与えることは、不可能である。何故なら、それは偶然性の連続に依存しているからである」⁽⁵⁾と弾刻している。

シャルル十世は、「四箇の勅令」で議會を解散し、その後召集していない。ゆえに、七月三〇日の議員会はもとより、八月三日、カジミール・ペリエを議長として開会された議會も無効である。一八一四年の憲章には、「国王は、毎年兩院を召集する (Le Roi convoque chaque année les deux Chambres)」⁽⁶⁾と規定しているからである。

しかも、「八月七日、憲章が修正され、ルイ・フィリップを国王に招へいした議會では、代議員二五二人の出席者のうち二一九人の承認をうけたが、その日は約二〇〇人が欠席していた」⁽⁷⁾。実にこの数は、「議會のやと半分ではない (à peine la moitié de la Chambre)」。そして、貴族院でも少数の承認しかうけなかった⁽⁸⁾。

メッテルニヒの「普通選挙の權威を欠き」とはこれらのことを指している。また、「歴史法則の強力な援助を得ていない」とは、ルイ・フィリップが、前任者シャルル十世から国王の任命をうけていないことを意味する。

「共和国の一般民衆の支持を欠き」とは、革命の原動力となった共和派の意向は、革命の最終段階では全く無視され、議會の大ブルジョアに騙されたことを示している。モロワ (André Maurois) は、「フランス人の王の人選については、誰がフランスに相談したのか……共和主義者も、王制主義者も、この愛すべき人物 (フィリップ) を篡奪者 (usurpateur) とみなしていた」⁽⁹⁾と述べている。メッテルニヒの批判で最も大事なのは、この第三の点であろう。

確かに、政治において、民主制の原理を支える一つの要素として、手続きの問題は、重要である。もし、ルイ・フ

イリップが、シャルル十世によって解散させられた議会ではなく、正式に国王に召集された議会で議決され、しかも、国王から任命をうけ、民衆の圧倒的支援をえたものであったならば、それは、理想的なものである。

しかし、革命は、単に正統性の根拠だけを求めておこるものではない。誰が自分たちの生命・財産・自由という生存の権利を守ってくれるかという最大多数の国民の、市民の生活感情からおこるものである。事実、フランス国民は、ルイ・フィリップを推戴した議会、憲章を改正した議会が、憲法制定会議でないから無効であるという「そうした微妙な問題については、ほとんど気にしなかった」⁽¹⁰⁾。

ルイ・フィリップの「七月王制」は、その成立が正統性の原理にもとづいた体制ではないから、はじめから脆さをもっていたとの主張は、一つの重要な指摘ではある。

しかし、「七月王制」が政治体制として、強国であったかいなかは、正統性の問題よりも、むしろ、具体的、現実的に、政府が、フランス国民の期待に応えることができたか、ルイ・フィリップが、一八三〇年七月三十一日、市庁のバルコニーにたった自分に、熱狂的な拍手を送ってくれた民衆の情熱と行動に応えようとしたかどうかにかかっているといえよう。

- (1) Maurice Duverger, *Les Constitutions de la France*, p. 71.
- (2) Jean Lhomme, *La Grande bourgeoisie au pouvoir (1830-1880)*, *Essai sur l'Histoire sociale de la France*, P.U.F. 1960. 木崎喜代治訳『権力の座にいた大ブルジョアジー』四八頁。
- (3) Benedetto Croce, *History of Europe in the Nineteenth Century*, translated by Henry Furst, p. 101.
- (4) 伊半訳前掲書一三八頁。原文は『Mémoires-documents et écrits divers laissés par le prince Metternich (Paris: Plon, 1882), vol. V. pp. 83-85.』
- (5) 伊半訳前掲書一九〇頁。
- (6) Maurice Duverger, *Constitutions et Documents politiques*, 1967, p. 84.
- (7) Philippe Vigier, *La Monarchie De Juillet*, p. 14.

- (8) Malet et Grillet, op. cit., p. 71.
- (9) 平岡他訳『ヘミムス(上)』四八四頁。
- (10) P. Beik, op. cit., p. 31.